HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本語の会話におけるフェイスバランス調整行動に関する語用論的研究 ： 自己卑下発話を中心に［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	隋, 暁静
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13816号
Issue Date	2019-12-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/76894
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Sui_Xiaojing_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　隋　　暁　静

審査委員　主査　教　授　加　藤　　重　広
　　副査　教　授　清　水　　誠
　　副査　准教授　水　溜　　真　由　美

学位論文題名
日本語の会話におけるフェイスバランス調整行動に関する語用論的研究
――自己卑下発話を中心に――

本論文は，日本語の会話におけるフェイスワークストラテジーについて，自己卑下発話を中心に据え，主として語用論の知見を用い，会話分析や統語論や社会言語学などの成果も援用しながら多角的に分析を加えた論考である。

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文では，まず第Ⅰ部第1章と第2章で研究の目的や構成を明示したのち，先行研究を批判的にまとめ直す中で，ポライトネスの研究が静的な原理と規則のしくみとして扱われた段階（いわゆる古典的ポライトネス理論）から動的なフェイスワークに関わる会話上の操作に重点が置かれ，インポライトネスへと拡張して行く段階（いわゆるポライトネス理論の第二期）へと転じる状況を丁寧に確認している。ともすれば古典的ポライトネス理論だけに注目して新しい成果を踏まえない研究がいまでも多く見られる中で，広範に先行研究を理解して踏まえている点は評価できるものである。

第Ⅱ部第3章と第4章では，フェイスバランスの調整が必要とされるフェイスバランスの不均衡状態がどのように位置づけられるかを論じ，通常の会話におけるフェイスバランスの著しい不均衡は会話を円滑に進める上での重大な阻害要因であることから，グライスの会話の協調原理に匹敵する原則としてフェイスバランスの均衡化という原則を設定する可能性を指摘している。フェイスの上昇や下降は，評価や要求などのFTA（フェイス脅かし）的発話では回避することはできないことであり，常にフェイスの上昇や下降に注意を払い，その均衡化と安定化を考えながら発話ごとに微調整を繰り返す作業を会話参加者がしていることが明らかにされている。第4章では，フェイスバランスの調整方策について，会話のどのような位置で開始するかについて区分し，即時調整と遅延調整が見られることを指摘している。また，フェイスバランス調整はフェイスの上昇や下降にかかわる発話のみでなく，共感表明など他の手法を使って微調整することも可能だとし，複合的な調整の手法についても個別の分析がなされている。

第Ⅲ部は第5章から第9章までが本論文の中核をなす自己卑下発話に関する考察となっている。第5章では，発話としての自己卑下と行動態度としての謙遜を個別に定義し，両者の差異を明確にしているが，この定義によって従来の敬語の区分とも不整合なく分析できる点は待遇行動研究における成果として評価できる。また，自己卑下発話の形式上の特徴として，否定的評価と解釈できる談話標識が拡張的に使用されていること，慣習推意や一般会話推意(GCI)と見るべき用法があること，誇張や緩和によって微調整すること，レベルや基準をずらすことによって相手のフェイスへの影響を最小限に抑えることなどが指摘されており，具体性のある重要な成果になっている。相手の褒めに対して自己卑下をすることは相手の発話への不同意であり，ポライトネス上の違反になるが，かといって，相手の発話を全面的に支持する発話を行えば自慢になり，これもポライトネス上の違反になってしまう。この二律背反の状況に巧みに対応する特徴が自己卑下発話に見られることを指

摘し，確認している点は地味ではあるが重要な貢献である。加えて，会話冒頭で行われる自己卑下が会話の展開を予測した上で，フェイスが上昇しすぎないようにあらかじめ下降させておくための予備的なストラテジーであること（第 6 章），自己卑下には FTA の軽減や負担の軽減や予防措置など動機と関与する点があること（静的分析，第 7 章），常に上下する会話参加者のフェイスに対応する類型の提案を行っていること（動的分析，第 7 章）など，今後フェイスバランスの研究を発展させる基盤となる成果も示されている。

第 8 章では自己卑下に対する聞き手の行動について分析をして，形式上は同意も不同意も見られ，話者にあわせる反応や共感提示のほかに，話題転換や無反応や自己卑下に自己卑下で応じるやりとりも見られることをさまざまなデータから指摘している。不同意として褒めを行う場合や話題を導入して褒める場合も，評価基準を変えて再評価提示を行う場合も，より説得力と信憑性を高めてフェイスバランスを調整するものであり，機能的にはフェイスワークが最優先であることが解明されたといえるだろう。総じて，フェイスバランスの均衡化について従前のグライスの会話協調原理と関連づけて再整理する可能性を示す成果と評価される。

自己卑下を中核に据えてフェイスワークを論じる研究としていくつも新しい知見をもたらしている点は高く評価されるが，一方で手堅く論じたためにやや掘り下げが足りないという印象もある。しかしながら，重要な指摘と提案を含み，今後の研究の発展の基盤となる点を含めて，重要な研究上の貢献となっている。

・学位授与に関する委員会の所見

以上の研究成果に関する評価を踏まえ，審査委員会として全会一致で，隋暁静氏に博士（文学）の学位を授与するのが適当であるとの結論を得たものである。